

聖書：ヨハネの黙示録 18：1～8

説教題：一日のうちに

日時：2021年8月1日（朝拝）

15章と16章で7つの災害の幻シリーズの最後のものとして「7つの鉢の幻」が示されました。その中の第7の幻——それに先立つ7つの封印の幻も、7つのラッパの幻もそうでしたが、第7の場面は世界の歴史の最後の日、主の再臨の日の様子を描くものです——その第7の鉢の幻の16章19節にこうありました。「あの大きな都は三つの部分に裂かれ、諸国の民の町々は倒れた。神は大バビロンを忘れず、ご自分の激しい憤りのぶどう酒の杯を与えられた。」この大きな都、大バビロンのさばきについて、より詳しく描いているのが17章以降です。17章1節で7つの鉢を持つ御使いの一人が来て、ヨハネにこう言いました。「ここに来なさい。大水の上に座している大淫婦に対するさばきを見せましょう。」この大淫婦とは、大きな都、大バビロンと同じです。17章では3節にあったように、まずその女、大淫婦が緋色の獣の上に乗っている様子をヨハネは見させられました。続いて御使いはこの女と獣の関係について、その秘められた意味について17章の残りの部分で解説しました。そうした上でいよいよ大淫婦、また大バビロンのさばきが今日の18章以降で示されます。

18章1節で一人の御使いが大きな権威をもって天から下って来ます。地はその栄光によって明るく照らし出されました。そして御使いは力強い声で叫びました。「倒れた。大バビロンは倒れた」と。すでに14章8節で、このことは前もって宣告されていました。「また、その御使いの後にもう一人、第二の御使いが来て言った。『倒れた、倒れた、大バビロンが。御怒りを招く淫行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた都が。』」そこで簡単に述べられたことが、いよいよここで詳しく述べられようとしています。まず大バビロンとは何でしょうか。すでにこれまで何回か見て来ましたが、バビロンと言って思い起こすのは何と言ってもイスラエルを捕囚したあのバビロンです。その王ネブカドネツアルはダニエル書4章30節で自らを誇り、次のように言っていました。「この大バビロンは、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が私の権力によって建てたものではないか。」この言葉に象徴されるように、大バビロンとは神を無視して自らを誇り、自らに栄光を帰すこの世の世俗都市とその文化、またその社会システム等を指します。しかしながら聖書が語るのは、そのような大バビロンは倒れる！ということです。この黙示録が書かれた当時で言えば大

バビロンはローマを指します。世界を支配し、この上ない繁栄を持っていた都です。そしてこのみことばは単に1世紀のローマのことだけでなく、終わりの日にかけて現れる究極的な大バビロン、世俗的で不敬虔なこの世の都市とその文化を指します。その大バビロンが「倒れた！」と宣言されています。実際にはまだそのことは起こっていませんが、それは確実に起こることとして「倒れた！倒れた！」と繰り返し、しかも過去形で述べられ、強調されています。

その大バビロンはどうなるのでしょうか。2節後半に「それは、悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた憎むべき獣の巣窟となった」とあります。これは旧約聖書で、もともとのバビロンへのさばきを宣告したイザヤ書13章19～22節を下敷きとしたものです。「こうして、諸王国の誉れ、カルデア人の輝かしい誇りであるバビロンは、神がソドム、ゴモラを滅ぼしたときのようなになる。そこには永久に住む者もなく、代々にわたり、住みつく者もない。アラビア人もそこには天幕を張らず、牧者たちもそこに群れを伏させない。そこには荒野の獣が伏し、彼らの家々には、みみずくがあふれる。そこには、だちょうも住み、雄やぎがそこで飛び跳ねる。山犬はその砦で、ジャッカルは豪華な宮殿でほえ交わす。その時が来るのは近く、その日はもう延ばされることはない。」これと同じように、歴史の終わりに現れる大バビロンも荒れ果てた状態、荒廃した場所とも言われています。そして特に悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟になると言われています。これはこの場所がさばかれて人が住めなくなり、代わりに悪霊が住むようになるという意味であるよりは、この大バビロンは実はこの悪霊や汚れた霊によって最初から導かれていた町であることを示すものと思われる。華やかで人々を引き付けていた大バビロンが神にさばかれ、その表面にあったものが剥ぎ取られると、そこに残ったのは悪霊たちだった。華やかなこの世の都市の背後にあって、これを導いていたのはこれらだった！ということです。

このさばきが臨んだ理由が3節にあります。「すべての国々の民は、御怒りを招く彼女の淫行のぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と淫らなことを行い、地の商人たちは、彼女の過度のぜいたくによって富を得たからだ。」これは17章2節で言われていたことと同じです。御使いは大淫婦へのさばきを具体的に語ろうとするこの18章3節で、もう一度同じことを述べているわけです。大バビロンは大淫婦とも呼ばれています。大淫婦とは人々を誘惑する存在であることを意味しています。どこへ誘惑

するかと言えば、人々をまことの神礼拝から引き離し、誤ったものへの礼拝へと導く。ですからこの「淫行のぶどう酒」とは、文字通りの性的な淫行ではなく、偶像礼拝のことです。当時のローマ皇帝ドミティアヌスは、自らを「主にして神」と人々に呼ばせ、皇帝礼拝を求めました。またこの偶像礼拝と深い関係にあったのは経済的な繁栄だったことが3節最後の言葉から分かります。人々はこの世の大淫婦ローマとつながるところにこそ、自分たちの祝福はあると考えました。ローマこそ自分たちに豊かな生活を約束する望みの都、あこがれの都、救いの都と考えました。その栄光にあやかるとするには何でもしました。「地の王たちは彼女と淫らなことを行い」とありますが、それは世界各地の町が率先して皇帝礼拝を取り入れようとしたことと関係します。黙示録が宛てられた小アジアの各都市も、互いに競って皇帝のための神殿を建て、ローマに忠誠を誓う町として名を上げようとしていました。そうすれば経済的な見返りがあります。その町は繁栄するでしょう。これが「彼女と淫らなことを行う」ということの意味です。商人たちも同じです。ローマとのつながりによって自分たちの収入は増え、ぜいたくな生活ができる。こうして人々は大淫婦が提供する淫行のぶどう酒を飲んだのです。そのぶどう酒を飲むと、この上ない幸福感に包まれると同時に正しい判断ができなくなります。偽りの幸福感に酔い痴れます。このように人々を誘惑して、神など不要であるかのように思わせ、偶像礼拝と墮落へと導いたがゆえに大バビロンは必ず倒され、滅ぼされると言われているわけです。

さてこの宣言を受けて、4節以降で神の民に対するメッセージが天から語られます。まず4節のカッコの中：「わたしの民は、この女の罪に関わらないように、その災害に巻き込まれないように、彼女のところから出て行きなさい。」これも旧約聖書で、大バビロンから離れよ！と繰り返し語られた言葉を下敷きにしたものです。イザヤ書48章20節：「バビロンから出よ。カルデアから逃れよ。」エレミヤ書50章8節：「バビロンの中から逃げ、カルデア人の地から出て行け。」51章6節：「バビロンの中から逃げ、それぞれ自分自身を救え。」51章45節：「わたしの民よ、その中から出よ。主の燃える怒りから逃れ、それぞれ自分自身を救え。」もちろん今日の箇所でも「彼女のところから出て行きなさい」とあるからと言って、クリスチャンはこの世から物理的に離れて隠遁生活をするようにと言われているわけではありません。主の民には世で証しする使命が与えられています。11章では教会が二人の証人にたとえられていました。またイエス様は弟子たちに「あなたがたは地の塩、世の光です」と言われましたが、塩は間に入って行ってこそ防腐剤としての役割を果たします。光も同じ

です。ここでも女に一切関わるな！ではなく、「この女の罪に」関わらないようにと
言われています。言い換えれば、私たちはこの世の中で歩みますが、世の人々の罪をと
もにしてはならないということです。この世と調子を合わせ、この世の人のようなな
ってはならない。世の人々と同じ考えで、経済的な利益のためなら、と信仰の歩み
において色々妥協し、神を後回しにする淫行のぶどう酒を飲むようなことをしてはな
らない。そういう意味で彼女のところから出て行きなさいということです。そうでない
と、この女、大バビロンに待ち受けている災害に巻き込まれることになる。5 節にあ
る通り、彼女の罪は積み重なって天に達しています。人々は罪を犯しても誰にも咎め
られないし、問題ないと思っているかもしれませんが、神は彼女の不正を覚えておら
れるとあります。ですからそのさばきがくだされる日、その刈り取りの日は来るので
す。

6～7 節は少し難しい箇所かと思います。そこに「あなたがたは、彼女に報いなさい」
と言われていますが、これは誰に言われているのでしょうか。神の民、私たち一人一
人にでしょうか。しかも倍にして返しなさいと言われています。私たちのような者が
勝手に倍返し行動に出たら、正義が実行されるどころか一層混乱が大きくなるだけ
では？と思います。そこである人は、ここで明示はされていないが、これは神のさば
きの特別な執行者に言われているとします。それは人間かもしれないし、天使かもし
れないと。またある人は、これは天使による神への懇願の言葉だと見ます。ここで命
令形の言葉が「報いなさい」「返しなさい」といかにも命令調で訳されていますが、こ
れは「報いてくださるように」「返してくださるように」という懇願あるいは嘆願の意
味であると。難しいところですが、どのように取るにせよ、これは神がこのようにし
てさばかれるということを述べたものでしょう。「倍にして返す」という部分は 2 倍
にして返すという意味ではなく、「複製する」「コピーする」という意味であると述べ
ている学者もいます。その場合は、彼女がしたことを複製して、コピーして、そのま
ま彼女に返す。つまり「目には目を、歯には歯を」の原則に従って正しいさばきが実
行されるという意味になります。

そんな彼女、大バビロンがどのように高ぶっているかが 7 節後半にあります。「彼
女は心の中で『私は女王として座し、やもめではない。だから悲しみにあうことはな
い』と言っているからです。」 この世で繁栄を誇る世俗都市また人間中心の文化に生
きている人は、このように自分を考えていると言います。私は女王である。この世界

の上に君臨している。私はやもめではない。一人ぼっちで困った状態に置かれている者ではない。むしろたくさんの方が私につき従っている。人々に恩恵を与える存在として私は人々にありがたられている。私には多くの支持者、サポーターがいる。だから私は悲しみに会うことはない。私はいつまでも幸福であろう。しかしそのように誇っていた彼女に恐ろしいさばきが臨むと8節に言われています。様々な災害すなわち死病と悲しみと飢えが彼女を襲うと。私は悲しみとは無縁であると豪語していた彼女に突然悲しみが襲う。また私はやもめではない、誰かの死によってその生活を脅かされる者ではないと言っていた彼女自身に死が臨む。また世の人々を富によって引き付けていた彼女自身が飢えるようになる。こうして彼女の高ぶりと誤った安心感に対するさばきが行われるのです。しかもそれは「一日のうちに」と言われています。「ローマは一日にして成らず」と言われますように、帝国を築くまでには数百年もの歳月を費やしました。そして築き上げた自分の繁栄した状態は、そう簡単には崩されないという自負が彼女にありました。しかしその都が滅ぼされるのはたった「一日のうちに」というのです。彼女は「火で焼き尽くされ」ます。旧約聖書に出て来るソドムとゴモラを思い起こします。あの豊かで繁栄していた町、ロトの目に魅力的に映った町が一日でさばかれました。神にはそうすることができるし、またそうされるのです。8節最後にある通り、「彼女をさばく神である主は、力ある方なのです」。そしてこのことがもたらす悲惨が、この後9節以降で述べられることとなります。

以上、大淫婦、大バビロンはさばかれるという場面の最初の部分を読みました。サタンは教会を攻撃するために色々な方法を用います。一つは獣によって、すなわちこの世の国家権力、支配者を用いてです。当時で言えばローマ皇帝を拜まなければ殺すという威嚇をもって、公的権力をもって神の民を迫害する。と同時に大淫婦による誘惑もあることがこの黙示録に示されています。この世の栄えを示して、神への忠誠をちょっとだけ後ろに置き、まずはこの世の繁栄、経済的的祝福、豊かな生活を味わうように！と。大バビロンに信頼し、その一部となって、この世で成功した人生を歩むように！と。しかし御使いは「倒れた！大バビロンは倒れた！」と語ります。豊かさを誇るこの世の都とそのシステムがたった一日のうちに破滅へと追いやられる。私たちは神なき世俗都市とその繁栄が行き着くこの最後を見つめることによって目を覚まさせられたいと思います。やがて過ぎ去り、無に帰すものに心奪われて、この貴重な人生を無駄に費やすことがないように。むしろそこから出て、いつまでも価値の残る、神に信頼し、神にこそ従う道を行く者であるように。

今日の箇所は大バビロンの罪と、その都にのしかかっているさばきという内容でほとんどが占められていますが、もしこれと対照的な天の御国に関することが触れられている部分があるとすれば、それは最初の1節2節でしょう。御使いが下って来た時、地はその栄光によって照らされました。それは御使い自身の光というよりも、神のもとから来た御使いであるがゆえに放っていた光でしょう。すなわち神の栄光の光の反映でしょう。その光の前ではいかにこの世で人々を引き付け、誘惑していた大バビロンといえども輝きはなし。御使いが放つ光はこの世のものとは別次元の、全地を一気に照らし出す強力な光でした。また御使いは力強い声、権威ある声で叫びました。この御使いの栄光とその力強い声は、この世とは比較にならない天の御国のリアリティーを示唆しています。神の世界はこのようにこの世と大きく異なる世界です。神はこの御国へ私たちを導き入れようとして語っていただきます。そしてその御国の素晴らしさがこの後の章で示されて行きます。このことを良く考えて、私たちは自分の行くべき道を選び取りたいと思います。やがてさばかれ、一日のうちに消えて過ぎ去ることのために献身することがありませんように。大バビロンの誘惑の中でも、そこから離れて信仰を堅く保ち、御国のために生きて、神がキリストにおいて備えてくださった救いの道、真の幸いな道を踏み行く神の民の歩みへ導かれたいと思います。